野家啓一は、ｉＰＳ細胞を使った再生医療の進展がもたらした倫理的空白を埋めるには、十分な議論を経た社会的合意が必要だと述べている。では、社会的合意に至る十分な議論はどのようにすれば可能なのだろうか。

ｉＰＳ細胞技術による医療発展に取り組む「P.S. i LOVE YOU」プロジェクトの立ち上げに先駆けて行われたアンケート調査（二〇二二年実施）によると、ｉＰＳ細胞技術を使った再生医療の進展について「今後の進展に大いに期待している・期待している」と回答した人が八一・六％に上る一方、ｉＰＳ細胞について「名前だけ知っている・知らない」が七二・七％を占めた。さらに、実用化に向けて倫理的な問題があると考えているのは二七・七％と低い割合であった。知識が不足し、倫理的な課題への認識が不十分な状況にある日本において、現状のままでｉＰＳ細胞を使った再生医療について社会的な合意を得ようとすることには大きな問題がある。

私たちが生命に関わる科学技術について議論するにあたっては、科学技術に関する正しい知識をもち、どのような倫理的課題があるのかをしっかりと認識しなければならない。そして、病で苦しんでいる人たちやそれを支援する人たちの現実を知ることも必要である。議論に際しては、科学技術が経済的利益と結びつくときに大きな過ちを犯す可能性があること、そもそも生命を機械のようには操作できないこと、科学技術も使い方によっては私たちを不幸にしかねないものであることをふまえたい。

こうした議論は、科学技術が発展し続ける限り、永続的に求められるものである。そこでは議論しながら知り、知りながら議論するといった往還が繰り返されることになる。いったん形成された価値観や倫理観は、細胞のように初期化できないかもしれないが、私たち自身の未来の問題として、自分たちで変えていくことができる。より豊かに生きる可能性を求めて、積み重ねられた歴史の上に新たな歴史を築く、そういった姿勢が大切になる。